

研究ノート

## タラゴーナの「アウグストゥス祭壇」をめぐる －地中海西部におけるローマ皇帝礼拝の生成－

山本晴樹

地中海西部におけるローマ皇帝礼拝の生成を考える時、まずわれわれが思い浮かべるのは元老院管轄属州ナルボネンシス（現フランス南部）の都市ナルボンヌ（古代名ナルボ）に設置された「ナルボンヌの祭壇」と呼ばれるものである<sup>(1)</sup>。この「祭壇」は後11年<sup>(2)</sup>ナルボンヌの平民がアウグストゥスの「ヌーメン」（神性）に捧げたものであって、ナルボンヌのforum<sup>(3)</sup>に設置された。この祭壇に対しては毎年6人の担当者<sup>(4)</sup>がアウグストゥスの誕生日（9月23日）を中心とする特定の日に礼拝をおこなうことになっていた。このようなことからわれわれは「ナルボンヌの祭壇」にローマ皇帝礼拝の生成をみたのである。

一方、元首管轄属州タルラコネンシス（現スペイン東部）の沿岸都市タラゴーナ（古代名タルラコ）<sup>(5)</sup>ではアウグストゥスに捧げられた祭壇（以下「アウグストゥス祭壇」）があったことが確認されており、これがもうひとつのローマ皇帝礼拝の生成をあらわすものと考えられる。しかしタラゴーナの「アウグストゥス祭壇」については、「ナルボンヌの祭壇」のような明確な遺物は残されていない。われわれがその存在を確認できるのは、文献史料ではクインティリアヌスの一文の中でのみである。それは彼が『弁論家の教育』（*De institutione oratoria*）（第6巻第3章77）で、「機知」について述べる以下のくだりである。

「またアウグストゥスは、彼の祭壇に棕櫚が生えたと報告してきたタラコの人々に「あなたたちがいかにしばしば火を点しているかが分かるね」と言いました。」（森谷、戸高、吉田訳）<sup>(6)</sup>

この文章だけでは何が「機知」なのか少々わかりづらい。『弁論家の教育』の訳注<sup>(7)</sup>を参考にすれば、タラゴーナの人々は、かつて彼らが設置した祭壇の上に勝利の象徴である棕櫚が生えた<sup>(8)</sup>ことに驚き、これは吉兆<sup>(9)</sup>であると判断して、アウグストゥスに報告した。これに対して、アウグストゥスは吉兆を喜ぶのではなく、棕櫚の木が生えてくるくらい、彼らがいかに稀にしか祭壇に対して礼拝していなかったかを揶揄したわけである。

アウグストゥスの卓抜なユーモアを彷彿させるくだりであるが、われわれが問題にしたいのは、その「機知」ではなく、棕櫚が生えた「彼の祭壇」の方である。この祭壇そのものは現存していないのでその実態はあきらかではない。ただ、アウグストゥスの後継者であるティベリウスの時代に鑄造された貨幣に「棕櫚の生えている祭壇」の図像が使われており、「アウグストゥス祭壇」の存在を証明するものとされている<sup>(40)</sup>。

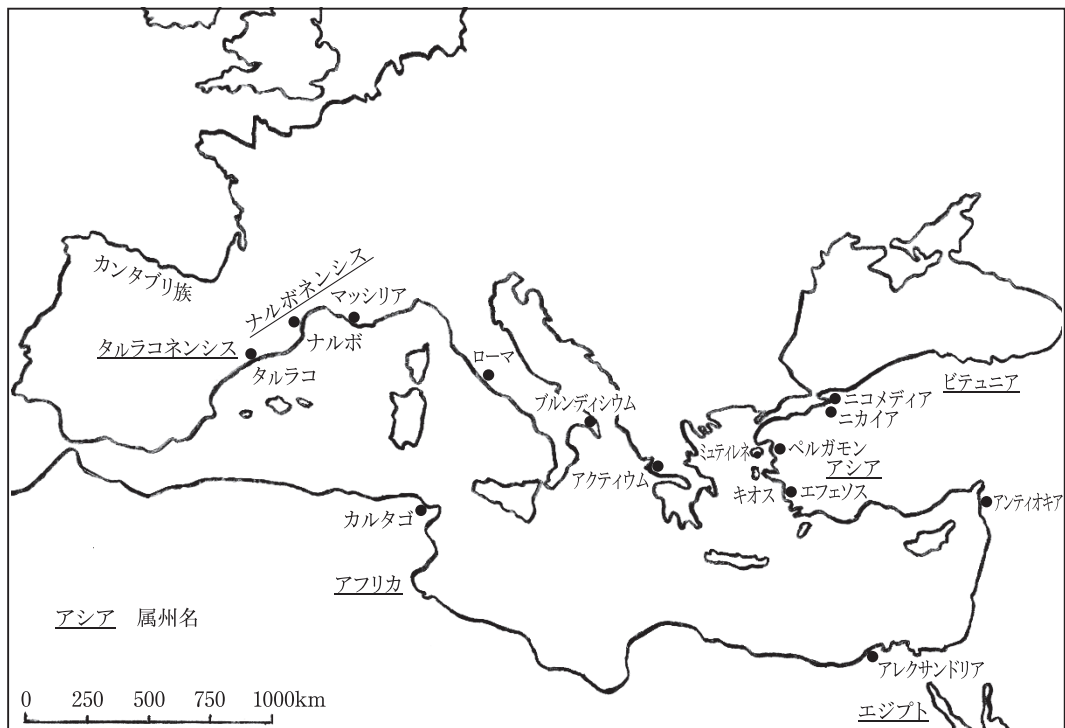


図1 帝政初期のローマ世界（ケリー（2010年）付図より筆者作成）

## 1. 「アウグストゥス祭壇」前史—ミュティレネとタラゴーナ

先に引いたクインティリアヌスの文章からすれば、「アウグストゥス祭壇」はアウグストゥスの存命中に設置されていたことは明らかである。それではいつ設置されたのであろうか。Fishwick (1987, p.172) は、アウグストゥスがタラゴーナに滞在していた前26年頃とする。オクタウィアヌスがアウグストゥスの名を与えられた翌年である。

この年と翌25年にかけて、小アジアのレスボス島の都市ミュティレネから使節団がタラゴーナ滞在中のアウグストゥスを訪問した。当時アウグストゥスは第8回目（前26年）と第9回目（前25年）のコンスルとして、現地のカンタブリ族に対する戦争の指揮のためタラゴーナに滞在していた。いわばこの間タラゴーナは地中海世界の中心であったわけである。アウグストゥスというローマの新たな指導者の登場を迎えて、地中海各地から彼を表敬訪問するために多くの使節

団がタラゴーナを来訪していた。ミュティレネの使節団もそのうちの一つだった。

ただミュティレネはこの訪問直前にアウグストゥスに対する礼拝を従来のゼウス信仰と同等のものとして設立することを決議しており、それをいち早くアウグストゥス本人に伝えるために、使節団をタラゴーナへ送ったのである<sup>(11)</sup>。地中海西部におけるローマ皇帝礼拝の生成を考える場合、このミュティレネによるアウグストゥスの礼拝に関する決議はきわめて重要と思われる。この決議の内容はこの使節団を率いたミュティレネ出身の詩人ポタモンを顕彰する碑文からうかがうことができる。顕彰碑には、それまでにカエサルからミュティレネに与えられた二つの書簡（前48年、前45年）<sup>(12)</sup>と前25年のローマ元老院決議<sup>(13)</sup>が記されている。

それによると、カエサルは二つの書簡でミュティレネに特権を付与している。第一の書簡（前48年）では、カエサルがミュティレネ出身のポタモンが代表する使節団と会談したことを述べ、カエサルが現在および未来にわたってミュティレネの恩恵付与者となることを記す。第二の書簡（前45年）では、カエサルは再度ポタモンが代表であったミュティレネの使節団と会談する。そしてまず使節団がカピトリウムで犠牲式を行うことを許可している。さらにミュティレネの都市とその領域が獲得する収入を享有することを許す。そしてカエサルが常に援助を惜しまないことを述べる。

ポタモンの顕彰碑には前25年のローマ元老院決議も記されている。それによれば、ローマとミュティレネとの間に条約が締結されている。その条約は両者の相互安全保障条約ともいふべき内容で、両者は対等な立場とされている<sup>(14)</sup>。また、ポタモンの顕彰碑は、彼がミュティレネとレスボス島のすべての神々の祭司に任命されたことを記す<sup>(15)</sup>。

共和政末期から帝政初期にかけてミュティレネはローマの指導的人物と密接な関係を持ち続けた。ポンペイウスとカエサルとの内乱では、初めポンペイウス側についた。彼の側近の一人にミュティレネ出身の哲学者テオフアネスがおり、ポンペイウスは彼に厚い信頼を寄せていた<sup>(16)</sup>。しかしポンペイウスがカエサルに敗れると、ミュティレネはカエサルに接近し、彼からの恩顧を得るために二度にわたって彼のもとへ使節団を派遣して、カエサルから有利な条件を勝ち得ている。この使節団を率いたのがポタモンであった<sup>(17)</sup>。

Rowe (2020, p.133f.)によれば、「決議」においてミュティレネではアウグストゥス（碑文ではセバストゥス）に対する新しい儀礼が、既存のゼウスに対する礼拝に則って行われる。その布告はペルガモンやその他の都市へも伝えられる。それは、アクティウム、ブルンディシウム、タルラコ、マッシリア、アンティオキアなどである。アウグストゥスの礼拝での犠牲式は毎月、彼

の生誕日に行われる。その際ゼウスに捧げられるのと同様に、そのために育成された牡牛<sup>(18)</sup>が犠牲獣として捧げられる。

ミュティレネの決議は、「天上の名声を獲得し、神の権威と権力を所有する人は地位と本性において卑しい人と決して同等とされることはできない。もしその人により栄光ある何かが発見されるならば、この都市の熱意と敬神は彼を一層神格化することにおいて何事も怠ることはないであろう」とまで記す。使節団は「決議」を記した碑文が、アウグストゥスの邸宅と、カピトリウムに掲示されることを要請する。そしてアウグストゥスの他に、以下の人々に感謝を捧げる。ローマ元老院、ウェスタの巫女、アウグストゥスの妻ユリア<sup>(19)</sup>、彼の姉オクタウィア<sup>(20)</sup>、そして彼の子供たち、一族および友人たち。最後に使節団はアウグストゥスに黄金の王冠を贈呈するとしている。

このようにミュティレネは、前27年にオクタウィアヌスがアウグストゥスの名を得るという新しい体制の到来にいち早く対応するために、彼に対する礼拝を設立する決議を出している。その際、礼拝の儀礼は従来のゼウス信仰の儀礼に則っている。そしてミュティレネはこの決議をアウグストゥスにいち早く報告するために、当時彼が滞在していたタラゴーナへ使節団を派遣した。従って、この決議がなされたのはおそらく前26年である可能性が高い<sup>(21)</sup>。

ここにはローマの新体制に対するギリシア都市の対応のひとつの具体的事例が現れている。B.レヴィックはこのようなミュティレネの対応を次のように解釈している。「アウグストゥスを敬うための建物、神事、注ぎ込まれた資金は、そのコミュニティと彼との関係を温め、将来は優遇してもらえるかもしれないという思惑があった。(マクリン富佐訳)」<sup>(22)</sup> 果たして、アウグストゥスはこのミュティレネに対して、前25年同盟条約の締結という元老院決議でもって報いた。ミュティレネ側の外交的勝利といえるだろう。そして、このことはタラゴーナの人々に強い印象を与え、タラゴーナにおけるローマ皇帝礼拝の生成に大きな影響を与えたと思われる。われわれはミュティレネというギリシア都市が果たした役割を認識せねばならないだろう。ただこのミュティレネの影響はタラゴーナにおけるローマ皇帝礼拝の全面的な成立にはつながらず、祭壇の設置という限定的なものにとどまったことも指摘しておかなければならない。

## 2. 「アウグストゥス祭壇」の設置

ミュティレネの使節団は鳴り物入りでタラゴーナに到着した。アウグストゥスをあたかも神と同一視する彼らの態度にタラゴーナの人々は大きく影響された。その後、アウグストゥスは重篤な病いにかかり、タラゴーナで療養することになるのだが、その際、人々のアウグストゥスの病氣回復への祈願はきわめて大きいものがあった<sup>(23)</sup>。またタラゴーナの人々は、ミュティレネの

使節団がアウグストゥスに対して、ギリシアの神々と同様の祭儀をすることにも影響された。これらのことから、恐らく前26年ごろ、タラゴーナの人々は「アウグストゥス祭壇」を設置することを決めたのであろう。この「祭壇」の設置によって新しい体制の創始者アウグストゥスに対する忠誠とそれを表明する具体的な儀礼を行うことによって、アウグストゥスからの恩恵付与への期待もあったものと思われる。それは彼らへ影響を与えたミュティレネの使節団がまさにタラゴーナで実際におこなったことでもあった。このことがタラゴーナにおけるローマ皇帝礼拝の生成と直接的に関係することになる。

ただこの時、アウグストゥス礼拝は、ミュティレネの人々が決議したような神殿建立やその祭司団の設立までは至らず、「アウグストゥス祭壇」の設置にとどまった。このことからすれば、タラゴーナにおける皇帝礼拝の生成は、ギリシア都市のその影響を受けつつも、タラゴーナ独自の形をとったと言わねばならないだろう。

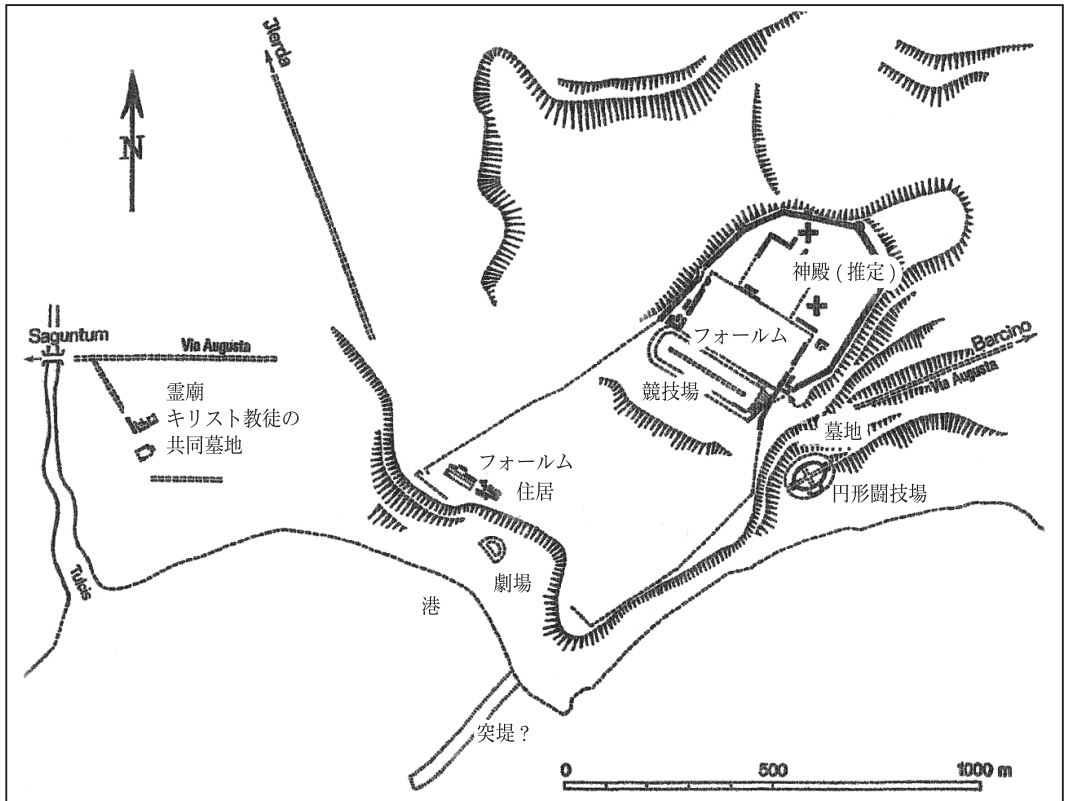


図2 タラゴーナの都市図 (Alföldy (1978), cols.601-2 付図より加工)

それでは、その「アウグストゥス祭壇」とはどのようなものであったのであろうか。

従来この祭壇に想定されてきたのが1919年に発掘され、現在国立タラゴーナ考古学博物館

に展示されている正面に《NVMINI / AVGVST》銘をもつ祭壇である<sup>(24)</sup>。その大きさは高さ94cm、幅60cm、奥行き60cmで、天辺には祭祀用の炉 (focus) とクッション状のもの (pulvinus) が施されている。正面上部には前述の銘があり、右側面に供物皿 (patera)、左側面に水差し (urceus)、裏面にリトウス (lituus)<sup>(25)</sup> の聖具が彫られている。

従来この《NVMINI / AVGVST》銘は〈Numini August(i)〉と読まれ<sup>(26)</sup>、アウグストゥスの存命中に彼のヌーメン (神性) に捧げられた祭壇と解釈され、タラゴーナにおけるローマ皇帝礼拝の生成と関係する祭壇として位置づけられてきた。ちょうどわれわれが冒頭で述べた「ナルボンヌの祭壇」に匹敵するものと思われたのである<sup>(27)</sup>。

しかしこの祭壇が1919年に発掘された場所はタラゴーナの下手にある forum ではなく、それより南東に少し離れた段丘下にあった劇場の遺跡の中であった<sup>(28)</sup>。前述のように「ナルボンヌの祭壇」は forum の中に設置されていたので、両者は設置場所が異なっていた。

Ruiz de Arbulo et alii (2009, p.187) は、もし《NVMINI / AVGVST》銘が〈Numini August(i)〉を示していたとすれば、二行目の《AVGVST》の末尾にはまだ文字が入る余裕があるので、最初から《NVMINI / AVGVSTI》と表記されたであろうと指摘している。そして、彼らは更にこの劇場遺跡ではフラウィウス期の三体の皇帝立像が発掘されていることから、《NVMINI / AVGVST》銘は〈Numini August(orum)〉と読めることを提起している。だとすれば、この祭壇はアウグストゥス期の彼個人のヌーメンに対するものではなく、アウグストゥス以降フラウィウス期までの諸皇帝のヌーメンに対して捧げられた祭壇ということになり、設置時期はアウグストゥス期ではなくフラウィウス期 (1世紀後半) まで下がることになる。従って、この《NVMINI / AVGVST》銘をもつ祭壇をアウグストゥスの存命中に設置された祭壇とみなすことには躊躇せざるをえない。

それでは、クインティリアヌスが言及した「祭壇」とはどのようなものであるのか。

アウグストゥスの時代ではないが、次の皇帝ティベリウスの時代に鋳造された貨幣から、それを伺わせるものが発見されている。それは表側にアウグストゥスの頭部像と《DIVVS · AVGVSTVS · PATER》銘をもち、裏側に棕櫚の木が生えている祭壇の図と《C(olonia) · V(rbs) · T(riumphalis) · T(arraco)》銘をもつ二アス貨 (dupondius) である<sup>(29)</sup>。裏面の祭壇図の詳細を見てみると、祭壇の天辺 (おそらく炉の部分) から棕櫚の木が生えており、天辺の左右にはクッション状のもの (pulvinus) が置かれている。祭壇の正面は左右の両端に縦筋の入った柱が描かれ、中央には左右二頭の牛の頭蓋骨 (bucranium) によって吊り下げられた花綱 (sertum) とその花綱で囲まれた内側に槍および楯が描かれている<sup>(30)</sup>。貨幣裏側の「棕櫚の生え



ている祭壇」の図は明らかにクインティリアヌスが言及した祭壇のイメージである。このことからすれば「棕櫚の生えた祭壇」というモチーフはタラゴーナではアウグストゥス期から伝えられてきたのであろう。

ここで描かれている「アウグストゥス祭壇」は明らかにアウグストゥスのヌーメン（神性）に対して奉献された祭壇とは異なるものである。これはどのようなものと考えられるのか。ここで参考になるのが Fishwick(1987) の説である。彼はタラゴーナの人々が設置したのは「女神ローマとアウグストゥス (Roma et Augustus)」に奉献された祭壇であったと考えている。Fishwick が根拠として挙げるのは、Dio 51, 20, 6-7<sup>(31)</sup> である。Dio はここで、アウグストゥスが前 29 年にエフェソス（アジア属州）とニカエア（ビトゥニア属州）に対して、「女神ローマと神皇ユリウス（カエサル）」の聖所建設を許可したこと、そしてエフェソスとニカエアに住むローマ人に対してはこの二神（女神ローマと神皇ユリウス）に敬意を払うべきことを命じ、ヘレネスと呼ばれる外人に対しては「アウグストゥス自身」に対する聖所の奉献を許可したことを述べ、これによりアジア属州の人々はペルガモンに、ビトゥニア属州の人々はニコメディアに聖所を建設した。Dio はそしてこの慣習は以後継続されたと述べている。この Dio の述べているアウグストゥスの原則に基づいて、Fishwick(1987, p.177) は、タラゴーナの人々が許可されたのは、「女神ローマとアウグストゥス」の祭壇であろうと推測している<sup>(32)</sup>。

Fishwick 説を裏付けるものに、タラゴーナにおいて「女神ローマとアウグストゥス」の祭司の存在がある。RIT 173 (= CIL II,6097) によれば<sup>(33)</sup>、Titus の息子である Nepos は flamen Romae et Augusti であった。すなわち〈Augusti〉という表記から Nepos はアウグストゥスの存命中に「女神ローマとアウグストゥス」の祭司 (flamen) であった可能性が高い。またアウグストゥス死後でフラウィウス期（あるいは 2 世紀前半）にもこの「女神ローマとアウグストゥス」礼拝が継続していた根拠として RIT 171 (= CIL II, 4224) がある<sup>(34)</sup>。それによれば Lucius の息子で Galeria トリプス所属の P. Licinius Laevinus は flamen Romae et Augustorum であった。〈Augustorum〉の表記から、ここでは上記礼拝がアウグストゥス死後も継続していることがうかがえる。

以上のことから、Fishwick 説は説得的であるように思われるのであるが、それでは「女神ローマとアウグストゥス」の祭壇であった可能性が高い「アウグストゥス祭壇」はどこに設置されたのであろうか。これに関して Etienne(1958, p.369) はあくまで仮説としながらもタラゴーナの高台にあり、後に属州聖域となる場所で、今日大聖堂が建っているところを考えている。しかし Fishwick (1987, p.173) によれば、この地域はティベリウス帝以前はまだ開発されておらず軍事訓練の場であり、属州聖域として整備されるのはフラウィウス期以降であるとして、「アウグス

トゥス祭壇」はタラゴーナの下手、港に面した forum に設置されたであろうとしている。この Fishwick の指摘は妥当のように思われる。しかし、Mar et alii (2015, p.348) は、近年タラゴーナの属州聖域からフラウィウス期以前の遺物が発掘されたことから、この遺物と「アウグストゥス神殿」<sup>(35)</sup>との関連を指摘し、神殿と祭壇とが密接に結びついていることを踏まえて「アウグストゥス祭壇」も後の属州聖域の forum に設置されたのではないかという説を提起している<sup>(36)</sup>。これまで「アウグストゥス祭壇」が都市聖域の forum に設置されたのは、いわば自明のこととされてきた感があったのであるが、近年の属州聖域における考古学発掘の進展によって、従来の理解に対する疑問が出されてきている。

これまでみてきたように、タラゴーナの「アウグストゥス祭壇」はギリシア都市ミュティレネの使節団のアウグストゥスとの会見を契機に前 26 年ごろ設置された。これは地中海西部でのローマ皇帝礼拝の生成の一契機であろう。このことに関してギリシア都市のアウグストゥス礼拝が果たした役割はある程度認められなければならない。しかし、この祭壇の設置はローマ皇帝礼拝の全面的な成立までには至らなかった。タラゴーナにアウグストゥスが認めたのは「女神ローマとアウグストゥス」礼拝のための祭壇のみであったからである。ギリシア都市に許可した神殿建立や祭司団の設立までには至らなかった。地中海西部のローマ皇帝礼拝の生成にあたって、アウグストゥスの慎重な対応がうかがわれる。ここには、タラゴーナの人々のアウグストゥスに対する礼拝の設立の要望を、アウグストゥスがすくい上げ、「女神ローマとアウグストゥス」礼拝の生成へと導いていった過程が現れているように思われる。

タラゴーナではこの「アウグストゥス祭壇」の設置を端緒として、まず都市レベルのローマ皇帝礼拝が生成される。そして次の段階として、この「祭壇」を中心にして既に述べた「アウグストゥス神殿」が建立される。この神殿はティベリウス期に建立されるわけであるが、その性格をめぐる近年さまざまな見解がだされている。その焦点は都市レベルの神殿であるのか、あるいは属州レベルの神殿であるのかというものである。これは後 1 世紀後半のフラウィウス期におけるタラゴーナの上手に建設された属州聖域の成立過程ともかかわってくる重要な問題である。「アウグストゥス神殿」の建立をめぐる問題が次の課題となろう。

[註]

- (1) 「ナルボンヌの祭壇」については Gayraud (1981, pp. 358-366) および山本 (2003 年) 参照。
- (2) 「祭壇」が実際に設置されたのは後 12～13 年である。
- (3) ここでいう forum は現在のナルボンヌの「フォーラム広場」(旧ピスタン広場)ではなく、そこから南西方向約 75m にあるホレウム (horreum 地下倉庫) の近辺であろうと推定されている。Cf. Gayraud (1981), p.258.
- (4) 「ナルボンヌの祭壇」の碑文の表現では、3 人の平民推薦あるいは選出によるローマ騎士 (equites Romani a plebe) および 3 人の解放奴隷 (libertini) である。



- (5) ローマ共和政期および帝政期のタラゴーナの歴史については Alföldy (1978), cols.586-597、特にユリウス・クラウディウス期については Alföldy (1996) 参照
- (6) クインティリアヌス、森谷、戸高、吉田訳 (2010 年) 72 頁。Quintilianus, *Inst. Orat.*, VI, 3, 77: Et Augustus, nuntiantibus Tarraconensibus palmam in ara eius enatam, apparet, inquit, quam saepe accendati.
- (7) 同書 73 頁訳注 (2) 「棕櫚は勝利の象徴であるので、タラコの人々はこのことを吉兆とみなしたのであろう。しかしアウグストゥスは別の解釈をし、彼らが稀にしか祭壇を使っていないことが木が生えた原因だとしたのである。」
- (8) 一見、祭壇に棕櫚が生えるのは荒唐無稽の話であり、作り話めいた感想を持つのであるが、しかしこれはありえない話ではないと指摘するのが Ruiz de Arbuló (2009, p.169) である。彼は大理石の祭壇はアウグストゥス時代はローマ以外では稀であり、ここでの祭壇の表面は石板のつなぎ合わせであって、その内部は土と砂とがまざったものでできており、そのなかに棕櫚の種が含まれていた場合、それが発芽する可能性があったと指摘している。スエトニウス「アウグストゥス」『ローマ皇帝伝』92 (国原吉之助訳) では、アウグストゥスが自宅の前庭の石畳の間から棕櫚が生えたので、これを中庭へ移植し熱心に世話をした話が紹介されている。
- (9) 何に対する吉兆なのかというのは明確ではないが、アウグストゥスのタラゴーナ滞在 (前 26 ~ 25 年) と関係づけて、その当時行われていたカンタブリ戦争に対する吉兆を読み取る研究者もいる (Etienne (1974), p.377)。しかし、アウグストゥスはカンタブリ戦争の指揮に疲弊し、重篤な病に陥り、そこから奇跡的に回復したのであるから (スエトニウス「アウグストゥス」81)、その戦争の吉兆が示されたのであれば、彼はおそらく歓迎しただろう。この場合、そうはしていないのであるから、この話はカンタブリ戦争が決着した後のことと思われる。
- (10) この貨幣の図版については註 (29) 参照。
- (11) ミュティレネが前 26 年に使節団を派遣した別の理由として、Jones (2015) はこの年にレスボス島に近接するキオス島で起こった地震を挙げている。彼はミュティレネもこの地震で被害を受けたと推測している。ミュティレネはこの地震による被害を報告し、それへの援助を要請するという意味でもアウグストゥスとの会談を望んだのであろう。
- (12) SIG 764. 碑文の英訳は Johnson, Coleman-Norton and Bourne (1962, no.111) 参照。
- (13) OGIS 456. Cf. Taylor (1931), p.274. 碑文の英訳は Rowe (2002, p.133f.) 参照。決議の簡潔な要約はケリー (2010 年) 32 頁参照。
- (14) これは実質的な同盟条約であろう。Rowe (2002, p.132) はギリシア都市のなかで自由都市は多くあっても、ローマと同盟条約を締結している都市は限られていると述べている。ミュティレネに対するローマの措置が特別なものであったことが想像される。ミュティレネ側の外交的勝利といえよう。これは、ひとえにミュティレネの使節団の代表ポタモンの業績であった。彼は前 25 年にアウグストゥスと出会って後、ミュティレネには帰らず以後アウグストゥスの側近となる。アウグストゥスとミュティレネ出身の文人との関係については Bowersock (1965, p.122f.) 参照。
- (15) これは彼がローマ皇帝礼拝の祭司でもあったことを暗示する。事実、Parker (1991, p.121) によれば、ポタモンはミュティレネにおける「女神ローマとアウグストゥス」の世襲的な終身の祭司であった。ポタモンの子孫はその地位を引き継ぎ、ミュティレネの支配層となっていく。なお小アジア都市のローマ皇帝礼拝についての簡潔な記述は増永 (2024 年)、117-121 頁参照。
- (16) プルタルコス (「ポンペイウス」『プルタルコス英雄伝 (下)』42) によれば、ミトリダテス戦争の勝利後、「ポン

ペイウスは、この地方(小アジア:山本注)の戦後処理を行い秩序を確立すると、以前にまさる威風をなびかせながら旅を続けた。ミュティレネに到着すると、同市出身のテオファネスの忠勤にむくいるためこれを自由市にした。同市の伝統である歌合せも参観したが、その時の歌題は彼の業績のみに限られた。(吉村忠典訳)「ボンペイウスはこの歌合せが行われた劇場から着想を得て、ローマのカンプス・マルチウスに「ボンペイウス劇場」を建設する。

- (17) Badian (1982, p.28) は同じミュティレネ出身の詩人クリナゴラスに使節団の主導者を見ているが、碑文 (SIG 764) で見る限り使節団の名前の筆頭にあげられているのはボタモンであり、クリナゴラスは使節団の一員にすぎない。
- (18) Taylor (1931, p.168, 274) では「白い牡牛」とされている。
- (19) 明らかに「リウピア」の間違いである。しかし、公式の文書でこのような間違いがなされていることに疑問をいだかざるをえない。あるいはミュティレネにはアグリッパとその妻ユリアが二度冬に滞在している (Rowe (2002), p.131) ので、このような間違いがおこったのかもしれない。
- (20) オクタウィアは前 11 年に亡くなっているので、この決議は少なくとも前 11 年以前に作成されていることになる。また「セバストゥス (=アウグストゥス)」の名が使用されているので、前 27 年以後の作成である。
- (21) Cf. Fishwick (1987), p.172.
- (22) レヴィック (2020 年) 379 ~ 380 頁
- (23) Etienne (1958, p.364) はこの感情こそがアウグストゥスに対する礼拝の端緒となったのではないかと指摘している。
- (24) この祭壇の詳細については RIT 48 とその図版 (Taf. VI 1-3) および CIL II<sup>2</sup> / 14, 2, 851 参照。
- (25) 曲がった杖状のラッパ。宗教儀礼で使用。
- (26) 代表的には RIT 48.
- (27) Syme (1939, p.473 et n.5) はクインティリアヌスの祭壇を「ナルボンヌの祭壇」とともにアウグストゥスのヌーメンに捧げる祭壇として挙げている。Ara numinis Augusti としての「ナルボンヌの祭壇」については Gradel (2002), p.239f. および山本 (2012 年) 参照。
- (28) この祭壇は劇場のオーケストラの前に設置されていた。Cf. Ruiz de Arbulo et alii (2010), p.187.
- (29) この貨幣の図版は Fishwick (1987), Pl. XXXVII b および Ruiz de Arbulo (2009), p.161 Lámina 2 参照。
- (30) この楯と槍という武具を、カンタブリ戦争の戦利品と解釈するのは Etienne (1958), p.377.
- (31) Cf. *Dio's Roman History VI with an English translation by E. Cary*, London, 1960, p.57.
- (32) Cf. Mellor (1981), p.1002.
- (33) RIT 173: [- - -]o T(it)i f(ilio) / [- - -] Nepoti / [- - -]no trib(uno) / [mil(itum) leg(ionis)] VI, flam(ini) / [Romae] et August(i) / [- - -] es d(ecreto) d(ecurionum). Cf. Etienne (1958), p.205 no.I.
- (34) RIT 171: P. Licinio / L. f. / Gal. / Laevino / aed., q., flamin(i) Ro(mae) et Aug(ustorum) , IIvir., praef. c(o)hor. novae ti(ronum), orae maritumae, / Iulia Q. f. / Ingeuna mater. Cf. Etienne (1958), p.205 no.IX.
- (35) タラゴナーナの「アウグストゥス神殿」については稿を改めて取り上げることになりたい。
- (36) これに対して、Macias and Rodà (2015, p.14) は従来の都市聖域での設置説を改めて支持している。

## 参考文献

### ・ 碑文史料

- CIL II<sup>2</sup> / 14,2 : Alföldy, G. (ed.), *Corpus Inscriptionum Latinarum* II<sup>2</sup> / 14, 2, De Gruyter, 2011,  
OGIS : Dittenberger, W. (ed.), *Orientalis Graeci Inscriptiones Selectae*, Leipzig, I-II, 1903-1905.  
RIT : Alföldy, G. (ed.), *Die römische Inschriften von Tarraco*, Berlin 1975.  
SIG : Dittenberger, W. (ed.), *Sylloge Inscriptionum Graecarum*, I-IV, Leipzig, 1915-1924.

### ・ 欧語文献

- Alföldy (1978) : Alföldy, G., *RE* Suppl.15, cols.570 - 644. s.v. Tarraco.  
Alföldy (1996) : *The Cambridge Ancient History X*, pp.449-463.  
Badian (1982) : Badian, E., Crisis Theories and the Beginning of the Principate, *Romanitas-Christianitas. Untersuchungen zur Geschichte und Literatur der römischen Kaiserzeit*, G. Wirth et al. eds., Berlin and New York, pp.18-41.  
Bowersock (1965) : Bowersock, G.W., *Augustus and the Greek World*, Oxford.  
Jhonson, Coleman-Norton and Bourne (1962) : Jhonson, J., Coleman-Norton, P.R., and Bourne, F.C., *Ancient Roman Statutes: A Translation with Introduction, Commentary, Glossary, and Index*. Austin: University of Texas Press.  
Etienne (1958) : Etienne, R., *Le Culte Impérial dans la Péninsule ibérique d'Auguste à Dioclétien*, Paris; réimpression 1974.  
Fishwick (1987) : Fishwick, D., *The Imperial Cult in the Latin West*, V.1,1, Leiden / New York / Kopenhagen / Köln.  
Gayraud (1981) : Gayraud, M., *Narbonne antique des origins à la fin du III<sup>e</sup> siècle*, Paris.  
Gradel (2002) : Gradel, I., *Emperor worship and Roman Religion*, Oxford.  
Jones (2015) : Jones, C.P., The Earthquake of 26 BCE in Decree of Mytilene and Chios, *Chiron* 45, pp.101-122.  
Macias and Rodà (2015) : Macias, J. M. and Rodà, I., *Tarraco, the first capital*, *Catalan Historical Review*, 8, pp.9-28.  
Mar et alii (2015) : Mar, R., Ruiz de Arbulo, J., Vivó, D., i Beltrán-Cabellero, J. A., *Tarraco: Arquitectura y urbanismo de una capita provincial romana*, Vol.1 : *De la Tarragona ibérica a la construcción de temple de Augusto*, Tarragona, 2015.  
Mellor (1981) : Mellor, R.J., The Goddess Roma, *ANRW* 2, 17, 2, pp.950-1030.  
Parker (1991) : Parker, R.W., Potamon of Mytilene and his family, *ZPE* 85, pp.115-129.  
Price (1984) : Price, S. R. F., *Rituals and Power. The Roman imperial cult in Asia Minor*, Cambridge U. P.  
Richardson (1996) : Richardson, J.S., *The Romans in Spain*, Blackwell.  
Rowe (2002) : Rowe, G., *Princes and Political Cultures*, The University of Michigan Press.  
Ruiz de Arbulo (2009) : Ruiz de Arbulo, J., El altar y el templo de Augusto en la Colonia Tarraco. Estado de la cuestión, in : J.Miguel Noguera (ed.) *Fora Hispaniae*. Murcia 2009, pp. 155-189.  
Ruiz de Arbulo et alii (2010) : Ruiz de Arbulo, J., Vivó, D., Domingo, J., i Lamuà, M., La scaenae frons del Teatro de Tarraco. Una propuesta de restitución, a: Ramillo, S. i Romering, N. (ed.), *La Scanae Frons en la arquitectura teatral romana (Cartagena, 2009)*, Múrcia, pp.173-202

Syme (1939) : Syme, R., *Roman Revolution*, Oxford U. P.

Taylor (1931) : Taylor L. R., *Divinity of the Roman Emperor*, Middletown; reprinted 1981.

・邦語文献

クインティリアヌス、森谷、戸高、吉田訳 (2010年) : 森谷宇一、戸高和弘、吉田俊一郎訳『弁論家の教育 3』京都大学学術出版会

ケリー (2010年) : クリストファー・ケリー、藤井崇訳・南川高志解説『ローマ帝国』岩波書店 (原著 2006年)

スエトニウス、国原吉之助訳「アウグストゥス」『ローマ皇帝伝 (上)』岩波文庫 1986年

プルタルコス、吉村忠典訳「ポンペイウス」『プルタルコス英雄伝 (下)』ちくま文庫 1987年

増永 (2024年) : 増永理考『ローマ帝国を生きるギリシア都市 小アジアにおける文化・経済のダイナミクス』京都大学学術出版会

山本 (2003年) : 山本晴樹「「ナルボンヌの祭壇」碑文 (CIL XII, 4333) 再考」『史学論叢』(別府大学史学研究会) 第33号 1-13頁 (<http://repo.beppu-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=sg03303>)

山本 (2012年) : 山本晴樹「ティペリウスによる numen Augusti の祭壇奉獻について」『史学論叢』第42号 58-65頁 (<http://repo.beppu-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=sg04207>)

レヴィック (2020年) : バーバラ・レヴィック、マクリン富佐訳『アウグストゥス 虚像と実像』法政大学出版局 (原著 2010年)

**Mot-clef:**

Mytilène, Tarragone, l'autel d'Auguste, *Roma et Augustus*, le temple d'Auguste

**Résumé:**

A propos de la genèse du culte impérial à Tarragone, le mérite de Mytilène est très grand, parce que le peuple de Mytilène a identifié Auguste avec le dieu Zeus, et qu'il a influencé profondément le peuple de Tarragone par cela. Selon D. Fishwick, le peuple de Tarragone a installé l'autel d'Auguste dans son forum environs en 26 avant J.-Ch. Et c'était l'autel pour Roma et Augustus. C'est vraiment la genèse du culte impérial à Tarragone. Cependant où cet autel se trouvait, c'est pour le moment une question. Il faut envisager cette question en se référant au processus de la construction du temple d'Auguste à Tarragone.